

カビールの信と名号

小林 圓 照

はじめに

東西の諸宗教において、絶対なるもの・聖なるものと人間との関係における信頼、信仰、信心、帰信の形態は、その宗教の根幹にかかわるものである。インドの宗教思潮においても、この「信」を表現する代表的な語として、リグ・ヴェーダ以来、*śraddhā* (ラテン語の *credo* と同原) が使用された。古典サンスクリットでは信念、確信、委信を意味する語としては、*viśvāsa*, *pratyāya*, *viśrambha* などが挙げられる。仏教では *śraddhā* は無論のこゝに、*prasāda* (淨信)・*adhimukti* (信解) が重要である。以上の諸語は、聖なる対象への理解、それに係わる自心の浄化といった知的・意志的な神人関係における「信」の意味が濃厚である。いっぽう情緒的な神への崇敬・献身の真意を表わす重要な術語として *bhakti* (信愛・誠信) がある。またその信愛の情感に連なる語として *prapatti* (絶対の敬虔・帰投・献身) が挙げられよう。

さてこの小論では、ヒンドウ・ムスリム融和の使徒と称されるバナールアスのムスリム織工 (Jalaha)・カジュール (Kabir, H 1440-1518) の詩頌から読み取れる「信」の諸相と、ラームの「名号」ないしは「称名」とを中心に、彼の思想を考察したい。カビールが *nirguṇa* (無属性) で *niranjana* (無染着) である靈性的真実を掲げて、万人平等の信仰を主唱したことは、実践においては、知恵 (*jñān*, *gyān*) と誠信 (*bhakti*, *bhagati*) との両道を、自然に統一できる原体験 (*paracā*) を得ていたことは周知のことである。筆者はカビール研究として、すでにサット・グル (*satguru*)・「中」(*madhi*)・「空」(*sunni*) に関する論文を発表した。これらの研究はカビールの思想背景のうち、ヴェーダーンタの不二一元の思想の俗信的な一面と、サハージ系密教 (金剛・易行乗の仏教的要素を含む) の影響の色濃いシヴァ派から出たナート派のヨーガ思想とに係わる領域であり、実践的には「智」を中心とするものであった。いまは「信」を通して、ヴィシュヌ派を基盤とするバクティ思

想との関連にポイントを置いて、カビールの信愛の世界を探って見る。

資料としてはカビールの作品中、思想的には無宗派的で、言語上では西部ヒンディーに属し、ダードウ(Dadu)派によるラージャスターニー(Rajasthan)伝承のカビール・グラントウワリー(Kabir-Granthavali, KGと略す)の第三「憶念・称名の章」(Sumirana kauṅṅ) 第九「体験の章」(paracā kau aṅṅ)と、第三二「信頼の章」(Besaṣa kau aṅṅ)などに散見する「信」思想に関するサーキー(sakhi)頌を研究の中心素材とする。ノムリット・ライ氏(Amrit Rai)の“A House Divided-The Origin and Development of Hindi/Hindavi”, Oxford Univ. Press, 1984の153-154頁でカビール詩頌の用語について論じているが、いまはテキストとしては、シャルロット・ヴォウドヴィル(Charlotte Vaudeville)女史編の“Kabir-Vaṇī”, 1982(ノラン・S・インド学研究所版)所収のKG₁(P.N.Tiwari 版) KG₁(S.S.Das 版)を使用する。加えて東方伝承の作品ビージャク(Bijak, Btと略す)や、スイック教に属するグルグラント(Guru-Granth)所収のサロク(Salok)にあつて対照できる部分(Guと略す)、あるいはパダ(Pada)やラマイニー(Ramainī)頌と対応する箇処や、他の作品で思想的に共通する部分などを参考にして、カビール詩に歌われた「信」思想の諸相について明らかにしたい。

一 ここにカビールのバクティの立場を表註する詩頌を紹介しよう。

「伝統の学習(jānān)もよい／ヨーガ(yoga)の実修ももっと大切だと知ってはいる／だがラームへの誠信を捨てはしない(bhagati na chādāu rāmaki)／たとえ人から責められようとも」(KG₂, 33-2, Gu 45)

このように決意表明する彼のバクティ思想も単なる熱烈信仰という型では把握しきれない独自性を持っていると思われる。信愛(Bhakti, bhagati)はもちろん、彼の「信」を表現する語としては、「愛」と訳すべき prema とか saneha にまで振幅するものがあるが、知と情との両面に互る「信」としては、一般的に“disavāsa”を採用するのが適切であろう。この bisavāsa (skt. Viśvāsa, 信頼・信念)の用例形を辞典“Kabir Koś” (ハシハラーム・チャールズ・デー編)の二八三・三〇〇頁に探ると、bisavāsa (a), bisāsa, besāsa などがあり、ヒンディーの śradhā, visvās, yācin と同義語として使用されていることが知られる。

その語の知的・意志的表現との関連でいえば、次の詩頌が自らの不動の確信・信念を語っている。

「火の鳥(Anāl)は虚空(ākāśa)に巣をさだめ／いつも中空(madhū)に住んでいる。天地すべてに超然とし／彼の信には支柱は不要(ina iḥalāra bisavāsa)」(KG₂, 20-8)

Anaī は不死鳥 (phoenix) であり、カビールはこの鳥を、「空」や「中道」に生きる不滅の靈性に喩える。その境地を支えるのが確信 (bisavāsa) である。伝統の教義やタントラの行で獲得したのではなく、何のサポートも不要で内から靈性を支える信力を意味する。

いっぽう bisavāsa の情緒的、信愛的な表現を次の詩頌に見出すことができ、ラームの名号との関連も明らかになる。

「身はパール (pāla) 〓 ジャスミンの花 / ここは蜜蜂 / 思念は快い芳香である。ラームの御名 (rāma nāma) の甘露で心を潤せば / 誠信の果実をもたらせる (phal jagā besāsa)」(KG₂ 32-10)

同様な「信」の歌には、ハリ (Hari = ラーム) への信愛 (bhagati) がなければ、幻や煙の宮殿ようだとも歌われる (KG₂ 15-40)。また bisavāsa と同様に、自からの選んだ神への信 (mohi bharosa iṣṭa ka) として “bharosā” (信頼・信仰) の語が使われる (KG₂ 32-7)。カビールが、真実の道友を求めても、みな自分のことばかりで、「信」のないことを歎く表現に、「心に信念 (paraiti, skt. praiti) なく、魂に信仰 (besāsa) のなく」(KG₂ 15-62) という用法が見られる。

二 つぎに信愛とラームの名号とについて考察しよう。カビールの教えには二元相対をこえた知恵を説く冥想の道的一面と同時に、真実なるものへの誠実な愛の一面である信愛があることが、両面に通じる “bisavāsa” の語法によって明ら

かとなった。ラームへの絶対帰依の称名の道に、禅定的な智の要素があることが認められた。そのバクティの対象となる聖名は「ラーム」の名号が中心となる。もちろんカビールの詩頌においては、ラームの名号の他にもヴァイシュナヴァの神名にかかわるものとして、Hari, Narāyaṇ, Govind, Ma-dhav, Kṛṣṇa, Gopāl などが散見できる。しかし「ラームの名号」ないしは「名号」という語それ自身が、唯一の至高である神性を表詮するものとして、ユニークであり、すべてに遍在する真実の扉を開くものと見なされる。

聖なるものの名前は憶念 (Sumirana) 称名 (唱名 nām-sunirana) 口称 (Uccāra, Japa) 歌唱 (Bhājana, gūṇa-kīrtana) などの実践の対象となつてはじめて名号 (nām, skt. nāma) となるが、前出の “Kabir Kōś” の二一〇・二二一頁の用例形では nāma (isvar kā nām), nāmki (Hi. nāmko), nāmā, nāmu, nāi, nāu, nāū, nāū, nav などが挙げられている。J. Gonda 氏は『古代インドの名辞と神名についてのノート』 (“Notes on Names and Name of God in ancient India”, Nieuwe Reeks, Deel 75, No. 4, 1970) にあつて「トールシードラス (Tulsidas) 』その他の敬信的な面をより重視した人々とは反対に、名号のもっている (śabda) 音声の面はカビールによって特別に強調された」(p. 97) と評している。さらに同書で Gonda 氏は、師匠 (タル) より伝えられた「名号」は、無頭

現の至高の存在としてのニルグナのラーマを把握する唯一の方便であったと解説(p.100)する。

カビールにとってまずラームの名号とは、RaとMaから成る「二字の名号」(Dui akhara)であり、心に保持する限り不滅のものである(Gu 171)。捨てるべきは無用の学習や書物であり、五十二文字の中から「二字のラとマ」に深く集注すればよかった(Rarai mamai cira lai, KG₂ 33-1)。霊性の世界ではただラームへの「愛の一語」(ekai akhara prema kâ, KG₂ 33-2)を判読してこそ学匠(バンディト)である。またラームの名号は偉大であり、正師より授けられた聖句(マントラ)であり、返礼し尽すことのできない程の無価のギフトである。同様の信仰は、ジニャーネシュワル(Jñānesvar)によって古マラティ語で歌われた“Haripāth”に見いだすことができる。「ハリの御名を口に唱えよ、こんなに得た利益(功德)をだれが算えあげることができよう」(hari mukhē mharā, という一句である。

つぎの一詩頌はカビールの名前と神名とのことばの遊びがあるが、内容は真剣なラームとの一致がテーマである。

「あなた(ラーム)ご自身、「偉大な」^{カビール}お方／わたしも「カビール」で、あなたの御名前／身命を捨てなければ／ラームの宝珠は手に入らぬ」(Gu. 31)

カビールとはアラールハ(Allah)の異名であり、カビールに

とっては、ラームもアラールハも、真実なるものとして差別はない。名号を唱えるには不動の信が必要である。疑いをいだいてラームを讃美しても、唯一なるものへの信心(cela bhāṇa tesāsa, KG₂ 32-3)がなければ空しい。あるいは神に信頼をおくもの(mohi bharosā isīaka, 32-7)が地獄に入らず救済される。神名を歌唱するだけでは神に遠い。しっかりと信をもって讃美するもの(jina gāya bisavāsa gahi, KG₂, 32-14)がラームの現前を得るなどと説き、それぞれ「信」の重要性を指摘している。

カビールの東方伝承の作品、ビージャク(Bijak)でも、正信もなくラームを唱えて自由が得られるのなら、水と称えて^と渴きをいやし、食物と呼べば飢えから解放される。こんな調子で全世界が自由になるのかと皮肉な口調で批判している(Sabda 40)。またマライニー(Ramaini)頌(33)でも、舌上へたこができる程、唱えても、信をもって真実に触れなければ無意味であることを歌っている。そのほか名号を正しく称えるには謙虚さ、自からの悪の自覚、自己浄化に目覚めることなどが必要なことを教える詩頌なども多く見られる。終局的には、名号を称えることによって迷妄(Maya)の世界からラームの世界、すなわち不死の都城、喜悅の国土(Amarapura, Amara-loka-Gu. 163, KG₂ 21-3, 29-12)に導かれるのである。カビールにおいては、心をラーマの御名に集注して生活

することが望まれる (KG₂ 3-8)。それ以外の行住坐臥はみな死の使い (Kala) に属する不真実ということになる。

三 信愛とラームの名号とを実践的・具体的に結びつけるのは、まず心のうちにラームを念すること (Rām-sūmīraṇa, skt-smaraṇa, Hi. sumaranā) すなわちラームへの憶念である。

憶念は、Smṛiti, anusmṛiti であり、形式的に言えば、仏随念・念仏 (Buddhānusmṛiti) にも通じる。カビールの憶念・称名 (唱名) の用語として、前出の “Kabīr Koś” 四〇〇・四〇一頁に探れど、Sumīraṇa (skt. smaraṇa, Hi. Sumaranā) = dhyaṇ karnā, jāp karnā, sumari, sumirata, (—nā, —ratā, —na, —āvai), sumari, sumiri (—tai) = cintan kar lo, jāp lo, sumirai (—rau, —yan), sumṛiti (skt. smṛti), suratā (skt. smṛiti, Hi. Surai) = dhyaṇ dvārā, surati (—tai), skt. smṛti = sudha, dhyaṇ などが挙げられる。名号を口称 (uccāra) するかどうかは別として Sumaraṇa は心を制して、聖なるものへ集注させることを意味する。これはラームの世界に没入する方法として重視された。このことはカビール以後、ナーナク (Nanak) に始まるシィック (Sikhs) 教の人々にも絶えず強調されている。名号はラームに心を定めるためにあり、その実践内容である Sumīraṇa には、前出の辞典に示された dhyaṇ karnā と Jap karnā との両意義があったように、心に専注す (jini hari kār nāmu cato, Gu. 92, 94, 221) 意味の場合も、

ラームの御名を称える (bain ucaraṇ tu nāma; mukha kahi e rāmu, Gu. 110, 119) 場合とともにラームに心を定めること外ならない。

さてラームの称名に専念する心持ちをカビールは俗謡の喩で歌っている。

「信愛のラームを捨てて／他の神名を称えることは／まこと遊び女の息子のごとく (Desvā kerā pūta iyaṇ)／いいたい誰を父とせよ (kahai kār sau bapa)」(KG₂ 3-20)

カビールの称名一行の三昧がここにある。

業と救済の問題は宗教のあるところ常に提起されるのであるが、カビールの場合には称名と業と救済との連関として語られる。

「ラームの名号、一句唱えただけで／百千旧業、一時に消えた／百千万劫よいこと積んでも／称名がなければ安らぎもなし (nahl nāṭ binu ihān)」(KG₂ 3-11)

ラームへの絶対の帰依のあるところ救済は用意され、称名によって一切の善悪の業は払拭されるのである。同趣の詩頌が KG₂ 3-10 にも見られる。ラームへの称名は、易行・自然・法爾・そのままといった状況に近いサハジ (sahaj) の語で表現される。彼の信仰が万民に開かれたもので、だれでも共に歩めるものである。あなた自身でラームを称え、他の人々にも御名を呼びよめよう (āpaṇa rāma rāma kahi, aurā rāma

kahai, KG₁ 2-23)といった「自信教人信」の歌さえある。しかし事實はどうであらうか。カビールは、ラームへの道の行路難をつぎのようなきびしい比喩で提示している。

「カビールは言う、ハリ(ラーム)へのほんとうの称名は容易ではない／杭の上のアクロバット・ダンスのように (suh upari nai vidhya)／」(間違えば命とり) (KG₁ 2-29, KG₂ 3-5)

別の頌 (KG₂ 14-19) では、ラームのバクティは得がたく (bhagati duhelii (= skt. durlabha) rāma ki) 心を決定しなければ、剣の刃で身を切り離されるような状態になるといふ。全身全霊で取り組まなければ、ラームとの出会いは成就しない。単なる口称の繰り返しでなく、徹底した称名が求められる。

四 より一歩進んだ称名の徹底とは何を意味するのであらうか。カビールの思想的・実践的背景となっているナータ派では、真実の口称 (jāpa, Hī. jāpa) は無口称の口称 (cāpa nāhai jāpa, ajapajāpa)、すなわら静寂・沈黙の口称であると強調する。口に唱えること (uccāra) は事実上、初心の実修を除いては必要とされ、より神名の憶念 (sumirāna) を通じて、深化、内面化を求める。見るものが見えざるものの中に没入するように、師によって聖句 (śabda) を与えられ、それを口称・憶念すること (surati) から口称することもなく、聖句もない (asābda) 状況 (nirati) となり、自己は大いなる自己

(yān āpa mahai āpa) と一体となる (KG₂ 9-19)。ちょうど水が氷となり、再び氷自身が融けるようにすべてが彼自身となる。信愛によるラームとの一体の体験を次のように歌う。

「あなた、あなたを繰り返し／わたしはあなたに成った／わたしの内に「私」は残らない／あなたの御名にわたしを捧げて／触目するところ、すべてあなた (yārī tere nān parī, jita dekhañ tita tū) (KG₂ 3-6)

同趣の境地が「一体の鏡」の比喩で説明される。

「心の内に鏡があっても (hiraḍa bhitar āraṣi (= darpana))／「ラームの」顔は映らない／心から差別が出て行ったとき (jau dila ki duvidha jāi)／ただその時にのみ現われる」(KG₂ 15-11)

見るものと見られるもの、写すものと映るものとの二元、相對 (dvitva) がある限り、ラームは出現しない。カビールの鏡(靈性・jiva)とラームが一体になったときこそ、ラームそのものとなって現われる。

五 カビールは、ラームの御名こそ真実・本質であると主張している。ラーム(ラーマ神)はもともとヴァイシュナヴィズムの信愛の対象であるが、無属性の真実を説くカビールにおいては俗信的な有相のラームではない。無相、無徳、無染の真実としてのヴィシュヌである。むしろカビールはその神名に拘泥しているわけではない。人々は四臂のヴィシュヌに

冥想するが、カビールは無量の腕をもつものに心を定めるとも言っている。そのラームの名号こそ、サーダナ（求道）の真実・本質であると説くのである。その用例を挙げれば、「称名こそ真実である」（*sumirana sara hai*, KG₂ 3-14）、「身・口・意での〔称名〕、それこそ憶念・称名の本質である」（*na-nasa bacā karanā, (kabr) sumirana sara*, KG₂ 3-17）「ラームの御名は至上の真実（あるいは真理の本質）である」（*rāma nāma nija sara*, KG₂ 3-13）などがあり、いかに誠信をもった憶念・称名がカビールの求道においての中核（*sara*）であったかが明らかにになる。同趣の詩頌として、ブラフマ神にも、シヴァ神にも、皆にも同様に話したのだ、「ラームの御名は至上の真実なり」（*rāma nāma tatasāra hai*, KG₂ 3-26）と、カビールは一句を述べ、「私の教えの、これが全つた」（*saba kahu upadesa*）とも表明している。

結語 カビールの「信」の思想と名号・憶念・称名を調べるといっても、詩頌のなかから把握する以外には方法はない。しかもその量は膨大であり、ラームの名号に関する表詮ひとつを挙げて、集約的な結論は出しがたい。ただ *bisvāsa*, *rāma nāma*, *sumirana*, *sara* といった重要な用語を中心に、その周辺の思想に幅を広げつつ検討した。それを要約すると、

1 「信」 *bisavāsa* の語を通じて明らかになったように、不滅

カビールの信と名号（小林）

の靈性への「確信」といった知的・意志的な世界と、カビールの情緒的な「信愛」の世界とは、本来、切り離されるべきものではなく、彼の原体験において内的に統一されている。

2 「信」の問題は、カビールの場合、ヴィシュヌ派を基盤とするバクティ思想に深く係ってはいないが、単なる熱烈信仰に留まらず、独自のものを持ち、とくに神性に関してもユニークな考えを表明している。

3 神名として「ラームの名号」を挙げるがその「名号」に拘泥しているわけではない。あえていえば「無相のラーム」であり、彼の命題ともいうべき「ラームの名号は真実、ラームの憶念・称名は本質である」といった句は、彼の「信」の思想の根幹を指摘するものである。

4 カビールの *Sumirana* の語は幅広く、憶念、称名、口称などを総括的に表現している用語であり、その深化・内面化を通じて、カビールの思想の知・情の両面にかかわるキーワードとなっていることが明らかになった。

5 カビールの名号と称名との考察を通して比較思想的な方法も今後の課題である。宗教現象としては、仏教の場合と対比できる多くの共通項をもっている。

6 Ch. Vandeville 女史が "Kabr", volume I, 1974 で指摘したように、カビールの憶念・称名とスーフィ (*sūfī*) の本質的な実修としてのディクル (*dhikr*) とが、緊密な平行現象をもっていること、あるいはその概念にひじょうに近似した点を挙げているが、今後の課題として明らかにして行きたい。

〔註記はすべて省略〕
 〈キーワード〉 カビール詩、信と名号、ラーマ信仰、バクティ運動

（花園大学教授）